

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

niwa 瀬波



2018
第5号

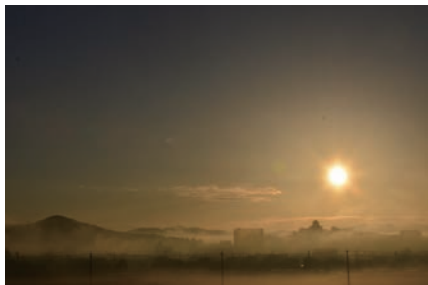
NiwaSaka.net



青塚古墳としだれ桜。



木曾川の溪谷美を作り出す
奇岩・二つ岩。



【表紙写真】
平成30年1月1日早朝に撮影。
犬山界隈が霧に包まれ、
白山平山（左）と犬山城の
シルエットが浮かび上がる。

中段写真・及び表紙写真 / 中野 耕司

NPO 法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要 第5号

niwa

邇波

目次

平成 29 年度活動記録

青塚古墳史跡公園	2
木之下城伝承館堀部邸	3
ニワ里ねっと自主事業	4
文化遺産関連受託事業	5
活動年表	6

研究論考

大山川水系と尾張國山村郷 赤塚次郎	8
高橋古墳群と天道塚古墳 —邇波の遺跡踏査成果その4— 服部哲也・近藤健一	13
呉州赤絵にみる丹波焼・三田焼・犬山焼 井上あゆこ	20

資料紹介

犬山市字北洞出土の須恵器について 大塚友恵	24
--------------------------	----

会員募集

27



平成 29 年度

活動記録



青塚古墳史跡公園

管理・運營業務を犬山市より委託を受け実施。H29年度で8年目となりました。6・9月に行われた古墳の清掃ボランティアでは、地元の方々を中心に多くの方にご参加いただきました。「ニワ里カレッジ」などの講座に加えて、小学生を対象にした「青塚こども教室」も開催しました。青塚古墳の作り石(=葺石)をテーマにした古代劇を上演、大変好評でした。

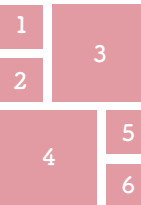
1) 古墳の清掃ボランティア活動。2) 小学校の見学案内風景。3) 「ニワ里カレッジ」古代の路をテーマに開催。4) 「青塚こども教室」藍染体験。5) 青塚古墳まつり。6) 古代劇「青塚の作り石」。



木之下城伝承館・堀部邸

3年目となる堀部邸の運営。春、秋の企画展ではそれぞれ犬山城下町、善師野のエリアをテーマに企画し、美しい写真の数々が邸内を彩りました。また、展示期間中には関連講座も行いました。猪之子座は、落語会や講談会のほか、地元住民の方に向けて、無料で昭和のものまね歌謡ショーなどを開催し、多くの方に堀部邸の雰囲気も含めて楽しんでいただきました。

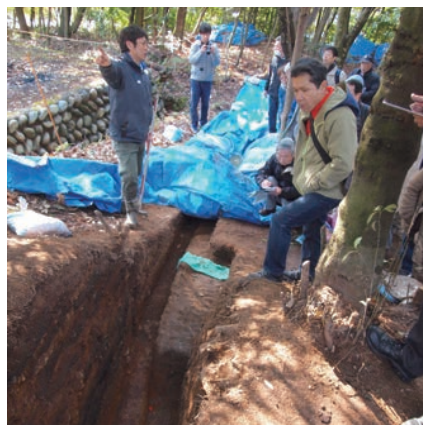
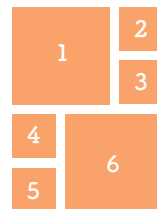
1) 休館中に障子貼りを行いました。2) 地域学芸員勉強会の様子。3) 秋の企画展「善師野宿とイカ石」関連講座。4) 猪之子座「ものまね寅さんがやってきた」。5) 堀部邸雪景色。6) 文化遺産講座「月津塾」。



ニワ里ねっと 自主事業

今年は念願の纏向遺跡を始め、脇袋古墳群など各地の遺跡を見学。近隣では、蓮野古墳や美濃金山城、坊の塚古墳の発掘現場も見学に行きました。昨年に引き続き「石あげ祭」に参加。会員さんの企画で、サイクリング史跡めぐりも初めて行いました。栗栖プロジェクトでは、地元のグループと一緒に栗栖地区の文化遺産を案内する看板やマップの作成をしました。

- 1) 石あげ祭に参加。
- 2) 富加町蓮野古墳の発掘現場にて。
- 3) 若狭町脇袋古墳群。雨の見学となりました。
- 4) 栗栖小学校の歴史学習授業。
- 5) ニワ里サイクリング@浅井古墳群。
- 6) 美濃金山城の発掘現場にて。



文化遺産関連 受託事業

長野県阿智村・愛知県犬山市・尾張旭市・春日井市・西尾市・岐阜県可児市・富加町・養老町などから委託を受け、ワークショップや講演会、企画展示など実施しました。5年目となる西尾市遺跡詳細分布調査は、今年度で報告書を作成し調査終了となりました。富加町では、新たに講談を取り入れた散策会や学校での歴史学習を開催し、大変好評でした。

1) 西尾市・文化遺産ウォーキング。2) 尾張旭市・民具企画展。3) 富加町・歴史講談ウォーキング。4) 養老町・火打石で火を起こそう！5) 犬山市・東之宮古墳葺石ワークショップ。6) 養老町・奈良時代体験ワークショップ。

1	3
2	5
4	6



7日：堀部邸文化遺産講座・月津塾

「古墳時代の石棺とイカ石」
①麻野純子・服部哲也（ニワ里ねっと）
②14:00-15:30 ③堀部邸 ④20名

14日-平成30年9月30日：【尾張旭市】第36回民具企画展「ブーム到来！戦前の瀬戸電沿線観光ー尾張三大弘法と蓬萊七福神めぐりー」

③スカイワードあさひ歴史民俗フロア

15日：第11回 瀬波史楽座「青塚の作り石」

①出演：包 金鐘ほか ②17:00-19:00
③楽田ふれあいセンター ④117名

21日-11月26日：【養老町】養老改元1300年記念展「養老の歴史1300年 Let'sタイムトラベル！」

③養老町・親孝行のふるさと会館

28,29・11月3,4,5日：【養老町】養老改元フェスタ・奈良時代文化体験コーナー

①ニワ里ねっとスタッフ ②10:00-15:00
③養老町・養老公園 ④のべ970名

11月

4日：【養老町】養老町文化遺産ウォーキング「養老公園の文化遺産を散策しよう！」

①廣瀬正嗣（養老町教育委員会） ②9:00-11:30
③養老町・養老公園 ④11名

9日：ニワ里バスツアー「黒塚古墳展と纏向遺跡見学ツアー」

①寺澤 薫（纏向学研究センター）ほか
③奈良県桜井市・橿原市 ④29名

11日：猪之子座no.11「ものまね寅さんが堀部邸にやってきた」

①出演：上ノジョ ほか ②13:30-15:00
③堀部邸 ④50名

11日：【犬山市】東之宮古墳散策ツアー

①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②9:00-12:00
③犬山市・東之宮古墳 ④21名

14-26日：【犬山市】東之宮古墳写真展

①写真：中野耕司 ③犬山市役所

18日：古墳よJAZZを聴け！ ③青塚古墳 ④27名

19日：ニワ里ねっとサイクリング 浅井古墳群見学

①古川博昭（ニワ里ねっと） ②9:30-15:00
③一宮市・江南市 ④6名

23日：【富加町】歴史講談！織田信長の東美濃攻略「夕雲の城」

①講談：旭堂南海 ②14:00-16:00
③タウンホールとみか ④230名

25日：【犬山市】歴史座 いぬやま災害伝承シンポジウム「入鹿切れ、天にのぼった二匹の馬」

①赤塚次郎（ニワ里ねっと）ほか ②13:00-16:00
③国際観光センターフロイデ ④85名

12月

3日：あいちの考古学

プレゼンテーション・ポスターセッション発表

5日-3月4日：【犬山市】企画展「地域に眠る文化遺産in栗栖」

③青塚古墳

9日：猪之子座no.12「旭堂南海の講談をたっぷり3」

①旭堂南海 ②14:00-15:00 ③堀部邸 ④21名

9日：ニワ里カレッジ「伊勢への道 死と再生・伊勢巡礼」

①和氣清章（松阪市嬉野地域振興局）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④24名

10日：【富加町】講談師 旭堂南海&学芸員とめぐる！「堂洞城と合戦ゆかりの地 城跡ハイキング」

①講談：旭堂南海・解説：島田崇正（富加町教育委員会）
②10:00-15:00 ③富加町堂洞城周辺 ④60名

11,12日：【富加町】学校講談

①講談：旭堂南海
③富加小学校・坂祝小学校・蜂屋小学校

14日：栗栖小学校歴史学習「栗栖の渡見学」

①三輪真也（ミラマチ栗栖） ②9:00-10:30
③栗栖小学校 ④19名

16日：栗栖・木曾川散策路ウォーキング

①三輪真也（ミラマチ栗栖） ②10:00-12:00
③犬山市・栗栖 ④29名

16日：【阿智村】最澄東国1200年記念企画 講談「最澄の神坂越え」

①講談：旭堂南海・解説：村上光田（信濃比叡廣徳院）
②14:00-16:00 ③熊谷元一写真美術館ホール

23日：【春日井市】楽しく学ぶ！瓦学習塾

②9:30-10:45 ③春日井市中央公民館

1月

6日：古墳よJAZZを聴け！ ③青塚古墳 ④82名

14日：青塚みやげ話の会「石取祭と風の盆」

①山崎よしえ・中野金弘（ニワ里ねっと）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④13名

27日：【犬山市】まほら講座「名所づくりと栗栖地区」

①可児光生（美濃加茂市民ミュージアム）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④19名

2月

2日：ニワ里バスツアー「夕田の谷と有知の湊」

①島田崇正（富加町教育委員会）・石井里英（美濃市教育委員会） ③富加町・美濃市 ④14名

9日：犬山市立楽田小学校 歴史学習

楽田城周辺の見学案内

10日：【犬山市】まほら講座「栗栖周辺の地質ー放散虫とアンモナイト」

①足立 守（名古屋大学） ②10:00-11:30
③青塚古墳 ④34名

11日：【犬山市】伝えられた災害歴史遺産を歩く「羽黒地区の文化遺産をめぐる」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30
③犬山市池野 ④24名

18日：【犬山市】まほら講座「栗栖周辺の地質を見よう！」

①足立 守（名古屋大学） ②10:00-12:00
③犬山市栗栖 ④26名

24日：【養老町】養老町こども歴史ワークショップ「キノコをつくらう！」

①津田 格（森林文化アカデミー） ②9:00-11:45
③ふれあいセンター養老広場 ④9組28名

26日-平成31年1月31日：【尾張旭市】考古企画展「長坂古墳群ー前面に城山窯、見下ろせば矢田川ー」

③スカイワードあさひ歴史民俗フロア

28日：地域学芸員勉強会

①山崎 陸（ニワ里ねっと） ②10:00-12:00
③堀部邸

3月

3日：青塚こども教室「東之宮古墳見学と鏡実験ワークショップ」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-12:00
③犬山市・東之宮古墳 ④8組17名

4日：【西尾市】「文化遺産発見ウォーク！」

①三田 敦司（西尾市教育委員会） ②10:00-12:00
③西尾市・正法寺古墳ほか ④25名

11日：ニワ里カレッジ

「3.11を忘れない！青塚防災講演会」

①服部哲也・大塚友恵（ニワ里ねっと）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④25名

17日：古墳よJAZZを聴け！ ③青塚古墳 ④60名

18日：【西尾市】分布調査成果報告会

「歴史講座in西尾 古代西尾を再発見」

①加藤安信（西尾市史編集委員）ほか
②13:30-16:00 ③西尾市・岩瀬文庫 ④40名

21日：地域学芸員勉強会

①山崎 陸（ニワ里ねっと） ②10:00-12:00
③堀部邸

24日：【犬山市】まほら講座「新発見！栗栖の遺跡を知ろう」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30
③青塚古墳 ④38名

31日：栗栖地区文化遺産ウォーキング

①服部哲也（ニワ里ねっと） ②10:00-12:00
③犬山市栗栖周辺 ④11名

■ 青塚古墳 入館者数16,977名（H29.4月-H30.3月）

■ 青塚古墳booklet作成

■ 青塚古墳絵葉書作成

■ 木之下城伝承館・堀部邸 入館者数5,382名（H29.3月-12月）

■ 犬山市民活動助成金事業 栗栖散策路整備・散策マップ作成

■ 瀬波里会報「さとの四季だより」38-43号発行

■ 【可児市】長塚古墳ペーパークラフト作成業務

■ 【各市町村】文化遺産カード事業

■ 【西尾市】分布調査成果報告書作成業務

2017.4 ▶ 2018.3

平成29年度 活動年表

日にち：【市町村名】行事名・講演タイトル

①講師名 ②時間 ③開催場所 ④参加者数

緑青色：青塚古墳での活動

桃色：堀部邸での活動

山吹色：その他の活動

桔梗色：文化遺産関連委託業務

4月

8-30日：春の企画展「犬山城下町遺産2017-04
犬山城下町DNAがよみがえる！」

③堀部邸

8日：猪之子座no.9 「犬山昔話と栗栖の渡」

①語り：広瀬まり・解説：赤塚次郎
②11:00-12:00 ③堀部邸 ④20名

9日：ニワ里バスツアー

「春の若狭路 膳臣斑鳩の里を求めて」
③美浜町周辺 ④34名

30日：堀部邸文化遺産講座・月津塾「織田街道を考えよう！
木之下城と小口城を結ぶ戦国幹線道路、原岩倉街道」

①赤塚次郎（ニワ里ねっと）②14:00-15:30
③堀部邸

5月

2-21日：【養老町】養老鉄道・春の祭礼巡り
スタンプラリー&ツアー

③養老町・大垣市・垂井町 ④のべ3,770名

6日：古墳よJAZZを聴け

③青塚古墳 ④48名

14日：第9回 青塚古墳まつり

②10:00-14:00 ③青塚古墳 ④1,120名

21日：総会 ③堀部邸

28日：青塚みやげ話の会

①近藤健一・服部哲也（ニワ里ねっと）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④13名

6月

3日：青塚古墳を守る会（古墳清掃ボランティア活動）

②7:30-9:00 ③青塚古墳 ④47名

7日：ニワ里バスツアー

「近つ飛鳥博物館・大阪歴史博物館見学ツアー」
③大阪府 ④25名

10日：ニワ里カレッジ「瀬波のみち」

①西松賢一郎（大町町歴史民俗資料館）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④34名

11日：猪之子座no.10「上方落語 九雀亭2」

①桂九雀 ②14:00-16:00 ③堀部邸 ④29名

18日：オリジナル勾玉づくり

①渡邊雅幸（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30
③青塚古墳 ④10名

7月

2日：古墳よJAZZを聴け！

③青塚古墳 ④45名

13日：栗栖小学校歴史学習サマーキャンプ

①三輪真也（ミラマチ栗栖） ②9:00-11:00
③栗栖小学校 ④19名

22日：【養老町】夏休み子ども歴史ワークショップ
「養老石で火をおこそう」

①水野裕之（名古屋市教育委員会）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④8組21名

29日：青塚みやげ話の会「最北古墳たび」

①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30
③青塚古墳 ④21名

30日：青塚子ども教室「青塚子どもツアー」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-11:00
③青塚古墳 ④6名

8月

2日：青塚子ども教室「青塚の藍で藍染体験」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-12:00
③青塚古墳 ④10名

6日：石あげ祭「ニワ里連」参加

③尾張富士浅間神社 ④15名

9,20,23日：青塚子ども教室「青塚子どもツアー」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②10:00-11:00
③青塚古墳 ④のべ25名

19日：ニワ里カレッジ「内津峠と下街道」

①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30
③青塚古墳 ④41名

26日：【養老町】夏休み子ども歴史ワークショップ
「作って舞おう！ダンボール獅子舞！」

②9:30-11:00 ③ふれあいセンター養老広場
④7組24名

9月

2日：【犬山市】語り部の集い

「田中天神の森と犬山街のはじまり」

①広瀬まり（語り）・赤塚次郎（解説）
②10:00-11:30 ③堀部邸 ④10名

3日：【養老町】歴史講座

「象鼻山古墳群と残された地震痕跡の謎」
①赤塚次郎（ニワ里ねっと）・森勇一（地質学者）
②9:30-11:30 ③養老農村勤労福祉センター
④135名

9日：青塚古墳を守る会（古墳清掃ボランティア活動）

②7:30-9:00 ③青塚古墳 ④41名

9日：古墳よJAZZを聴け！ ③青塚古墳 ④31名

10日：【犬山市】伝えられた災害歴史遺産を歩く

「入鹿池周辺の文化遺産をめぐる」

①大塚友恵（ニワ里ねっと） ②9:00-11:30
③犬山市池野 ④24名

16-24日：「模刻展 篠原英政」

③堀部邸 ④356名

17日：ニワ里カレッジ「神坂峠と古代東山道」

①市澤英利（飯田市上郷考古資料館）
②10:00-11:30 ③青塚古墳 ④28名

21日：ニワ里バスツアー

「国史跡美濃金山城跡と城下町を歩く」

①長江真和（可児市教育委員会） ③可児市
④13名

22日：発掘現場見学ツアー「坊の塚古墳」

③各務原市鷺沼 ④6名

24日：【犬山市】東之宮古墳「土あげ祭ワークショップ」

①赤塚次郎（ニワ里ねっと） ②9:30-12:00
③犬山市・東之宮古墳 ④11名

30日：【犬山市】語り部の集い

「やろか水と木曽川の洪水伝承」

①語り：広瀬まり・解説：赤塚次郎
②10:00-11:30 ③堀部邸 ④12名

10月

1-13日：青塚古墳写真展

①中野耕司・道家晴規（写真） ③犬山市役所

1日：青塚子ども教室「秀吉の陣地、楽田城を攻略せ

よう！」
①ニワ里ねっとスタッフ ②10:00-12:00 ③犬山
市楽田 ④7組19名

7日：ニワ里カレッジ「犬山の峠」

①服部哲也（ニワ里ねっと） ②10:00-11:30
③青塚古墳 ④29名

7-29日：秋の企画展「善師野宿とイカ石」 ③堀部邸

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
赤塚 次郎

木曽川が造り上げた広大な犬山扇状地、その場面が古代「邇波」の領域と大きく重複することはすでに指摘しておいた。そしてその南東には「春部」郡が広がっていた。

ただ邇波（丹羽）郡と春部郡の境界については判然としないが、尾張國春部郡を現在の小牧市・春日井市・北名古屋市・名古屋市北区の北部域などを含めた領域と推定することが一般的な傾向であろう。

『和名抄』には「池田・柏井・安食・

山村・高苑」の5つの郷が掲載されており、そのほかに余戸・篠木郷が存在したことが類推されている。各郷の場所については諸説あるが、概ね「柏井」郷が旧柏井村を中心とした春日井市南西部に、「安食」郷はのちの安食庄との関係から春日井市西端・名古屋市北区の庄内川中流域を起点とし、6世紀代に設定されたとされる「間敷屯倉」と重複する考え方が支配的である。「高苑」郷は北名古屋市内に比定する見解が主体を占めて

いるようである。何れにしても概ね春部郡と邇波郡の境を現在の小牧市域に求めることは間違いないさうである。さらに春部郡高苑郷とは邇波郡南端の岩倉市域と北名古屋市域で接していたと推定でき、五条川のいわゆる「大曲」がその境界をなしていたと思われる。

さて春部郡の北部域に存在し、邇波郡と界をなすであろう郷に「山村郷」がある。

ここでは邇波郡との界を接する場面「山村」郷を、まずは小牧市東部の「大山川」水系を中心とする場面にあてて考えていきたい。その根拠は、考古資料の中に重要な手がかりがある。すでに指摘されているように小牧市篠岡古窯跡群の発掘調査成果によれば、篠岡78号窯から「尾山寸」「山寸」と刻書された須恵器が出土している。また大縣神社所蔵に「尾張山寸」などが伝わっており、これらの刻書は尾張國山村郷を意味するものと解釈されている。おそらく尾北窯としての核をなしていた篠岡古



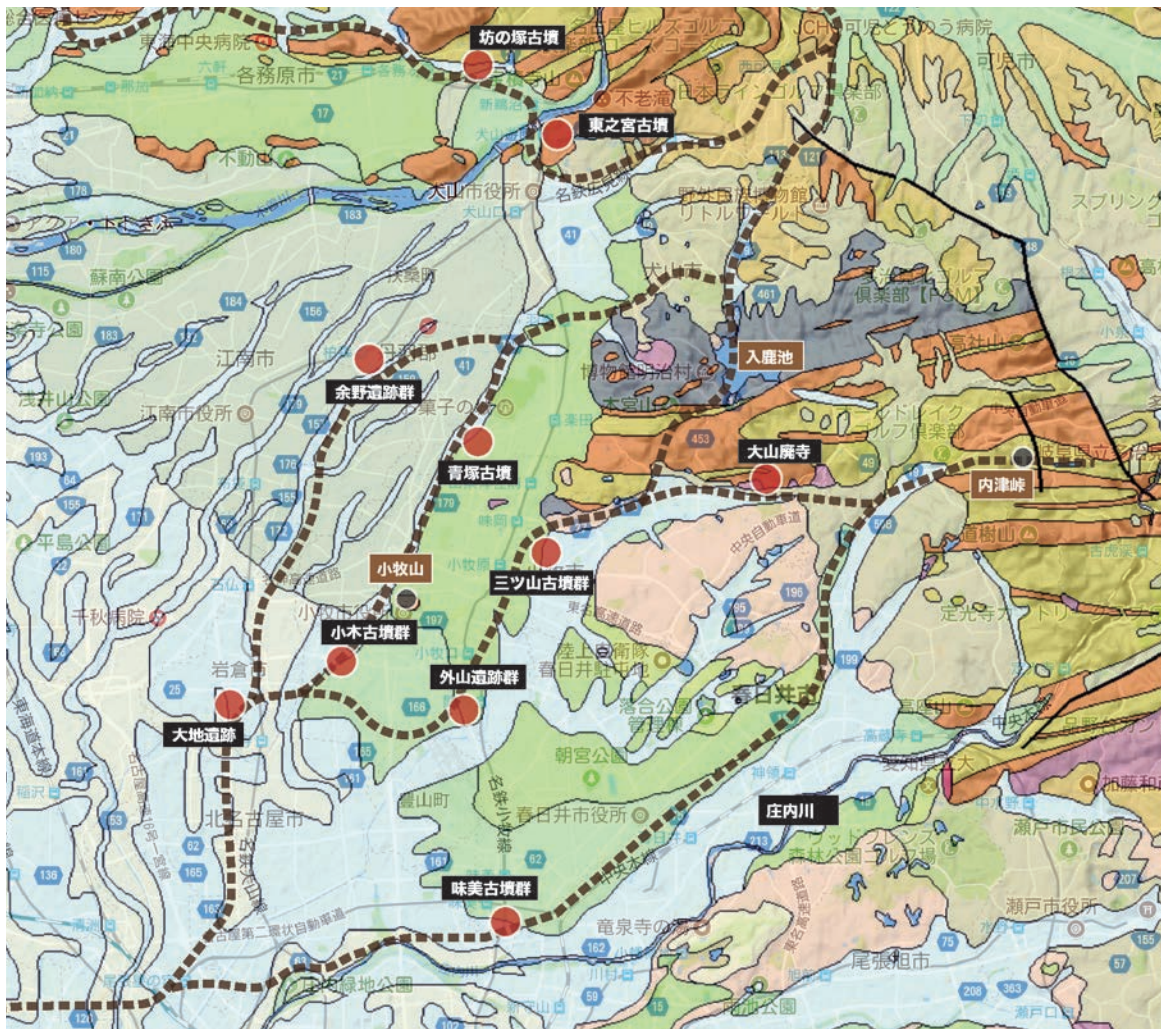


図2 山村への二つの路、推定（webシームレス地質図を活用）

口地区から流れる小河川を集め谷口である味岡に至る。現在ではその後は東田中地区から小牧市西南部へと流れ、春日井市域から来る西行堂川と小牧原から流れてくる池田川の二河川と外山と牛山の谷間で合流する。そしてさらに豊山町で新境川、北名古屋市中江川など合流し、新川の流れとなる。

ところで旧版地図や明治期の航空写真などを参考にして大山川の本流域を推定復元すると、小牧面と呼ばれる台地上で谷地形が最も発達した場面が大山川水系であったことが良くわかる。そこでここであらためて地相を確認していこう。図2を見ると木曽川の広大な扇状地（犬山扇状地）には網の目状のいく筋かの流路が流れ落ちており、特に岩倉市・一宮市域はその流路が複雑かつ不安定であったことが地形図からも読み取れる。そのことは多くの歴史事象・伝承などからも明白でもある。大山川水系においても、大山の谷間から西流し、小牧面である現在の岩崎山・味岡の台地にあたり、東田中で南流、東部丘陵の水を集めなが

ら外山・牛山で流れがまとまり、再び西流し濃尾平野低地部に流れ落ちる。外山地区の南は現在の名古屋空港にあたる場面で湿地帯を形成し、やがて庄内川に流れ落ちていたと推定できよう。地形的には大山の谷間から外山・牛山に至る大きな河川堆積地帯が一つの領域となっていたことがおぼろげながら推察できる。

4. 二つ路（段丘崖と谷路）

こうした地形と河川の流れの中で、濃尾平野低地部からの東美濃地域への路としてもっとも安定した場面を想定してみると、概ね二つの路が考えられよう。一つは小牧面・犬山台地の河岸段丘端部を北上する「段丘崖の路」、中下川水系・段丘端部を抜ける道である。その起点は、平野部から小牧面に至る最初の場面として小牧市小本地区が考えられよう。ここから犬山青塚・羽黒を通り流路に沿って遡上する。さらに犬山東部丘陵を経て岐阜県可児に至る路も想定できる。

今一つは、濃尾平野の中でもつ

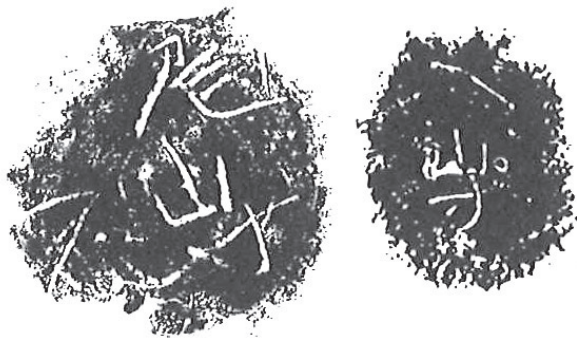


図3 篠岡78号窯出土品（『愛知県史資料編4』より）

とも大きな谷状地形が広がる「大山川」を遡る路が考えられる。すると小牧面から大山川への入口が、まさに外山銅鐸が出土した外山遺跡群が所在する場面となる。「小牧面段丘崖の路」と「大山川の路」沿いの遺跡群をもう一度再評価し、古代の文化・ヒトの流れを整理する必要がある。前者は小木古墳群・青塚古墳、そして東之宮古墳と「前方後円（方）墳」が造営された場面でもあり、後者は岩倉上市場・二宮・外山銅鐸、さらに時代が少

し下がるが篠岡丘陵で窯業生産、加えて鍛冶関係の遺跡が見つかったいる狩山戸遺跡や西山遺跡などの鉄生産にまつわる遺跡。これらは入鹿池周辺を含めた犬山市から小牧市に広がる東部丘陵を結ぶ山の道でもある。では次にこの「山の道」谷路としての大山川水系の拠点集落を訪ねてみよう。

5. 外山（とやま）遺跡群

名鉄小牧線「間内」駅周辺の北外山・南外山地区に展開する遺跡群をここでは仮に「外山遺跡群」と呼んでおきたい。その内容は式内社外山神社を中心に縄文時代から弥生・古墳時代、古代・中世期にかけての複合遺跡が存在し、外山神社からかつて出土した「外山銅鐸」の評価や、近年発掘調査された内方前遺跡などの成果（2世紀から4世紀・廻間式から松河戸式、7世紀から9・10世紀）を踏まえれば、弥生時代後期から古墳時代にかけてこの地域に一つの拠点的な集落遺跡とその母体となる部族社会が存在したことは容易に推察できよう（南外山東浦遺跡

からは方形周溝墓が見つかった（る）。景観的には大山川水系に含まれ、小牧原から流れる池田川や春日井市田楽地区から流れる西行堂川などが合流する地点であり、段丘上の高台に南北に展開する集落

景観が復元できる。現在もこうした風景が良く観察でき、おそらく南面には名古屋空港が存在する場面に広く湿地帯が広がっていたものと思われる。なお外山遺跡群の西側は犬山城下町から青塚古墳、そして小牧市小木に繋がる段丘崖が発達した台地面が広がるが、中江川の氾濫原でもありその間が「小針」と呼ばれ、現在の尾張神社が鎮座する地帯となっている。1915年に発見された外山銅鐸は、外縁付鈕1式に位置付けられ当地域では最古の銅鐸である。また二宮銅鐸や伝岩倉（上市場）銅鐸といった瀬波郡内の銅鐸と合わせ、五条川・大山川水系での拠点的な集落とその地域的な単位を類推することができる貴重な資料でもある。まさに銅鐸祭祀が執り行われた弥生の路が存在した。ただ、現在のところこの場面に首長墓と

思われる明確な前方後円（方）墳が見つかっていない。しかし興味深い遺跡として、次にあげる東田中の墳墓群が所在する。

6. 三ツ山古墳群

薬師川が流れる小牧市北部の東田中地区に三ツ山古墳が所在する。3基の方墳によって構成すると考えられており、そのうちの1・2号墳が発掘調査され、3号墳だけが現存する。調査結果によれば、1号墳は22mほどの方墳で、粘土槨より獣帯鏡などが出土している。2号墳は二つの主体部が見つかっておりそれぞれ神像鏡・振文鏡が出土している。3号墳は21mの方墳と推定されている。副葬品から三ツ山古墳群が古墳時代前期、4世紀中頃を中心に造営されたことがわかるのであるが、前方後方墳の宇都宮古墳を含めた小木古墳群との関係から、1号墳などは40mクラスの前方後方墳であった可能性も否定できないと思われる。いづれにしろ3世紀後半から4世紀にかけて活躍した指導者とその仲間達の存在が浮かび上がってこよ

う。また三ツ山古墳群下層にはパレス壺やS字甕などの遺物が見つかっており、明らかに廻間式土器（主体はⅡ・Ⅲ式か）を含む集落遺跡の存在が認めらる（東田中宮前遺跡）。こうした集落遺跡の広がり、その後重要な問題を含んでいるが、その時期は外山遺跡群の内方前遺跡の調査で分かってきた竪穴建物や墳墓の時期と重複することは明らかである。三ツ山古墳群が東側の薬師川・大山川の低地帯を望むやや高所に位置することから大山川水系の谷状地形とその周辺部を生活域とするまとまりが浮かんでこよう。

同様にやや時期が下るが、三ツ山古墳群の対岸である篠岡丘陵の西端部、下末地区には尾張型埴輪を所有する下末古墳が所在する。またその南には台地端に沿って春日井市田楽地区の「伊多波刀神社」周辺にも田楽遺跡のように古墳時代から奈良時代にかけての集落遺跡の展開が想定されよう。このように大山川水系には谷地形を挟んで両側の台地端にはそれぞれまとまりある生活域が営まれていた可

能性が考えられる。こうしたまとまりの起点、中核的な地区は外山遺跡群が存在する場所であったと推定したい。それは大山の谷間からの各小河川が集まってくる場面であり、その南西には湿地帯が広がり、庄内川から濃尾平野扇状地を迂回して美濃・信濃に至る物流の拠点として位置付けることもできる。

7. 「やまむら」という領域

以上、「やまむら」と呼ばれた原風景は、大山川水系とその背景に広がる丘陵地域をその主要な領域として誕生した。その淵源は古来より濃尾平野では最も大きく開けた谷地形を有する大山川の流れを源とする谷・山の路に由来して生活する集落遺跡間のネットワークが根底に存在したものと考えておきたい。そして大山川に流れ落ちる小河川が集まり、そこに段丘上ではあるが湿地が広がる場面、弥生時代から古墳時代へと継続し、南外山遺跡の掘立柱建物などを考慮しても外山遺跡群が、その中核的な存在と位置付けてよからう。

この谷路は、あるいは庄内川中流域に設定された「間敷屯倉」と犬山の東部丘陵に存在したと推定されている「入鹿屯倉」、そして木曽川水系の集落遺跡などをつなぐもう一つの物流ルートを形成し、あるいは屯倉の設営に大きく関与していた可能性も推察できよう。さらにその延長線上に篠岡丘陵に新たな窯業生産地が造られていく。そこには古くからの大山川水系の谷「路」と丘陵部に広がる豊かな森林と地下資源（鉄や良質の粘土など）、また良質な水資源などが結びつく戦力的な生産拠点の開発が見えてくる。これらは概ね6世紀代から7世紀にかけての一つの出来事性でもある。尾張型埴輪の出土や窯業生産、そこに刻まれた文字など、そこにこの時代に尾張地域に大きな影響力を行使し始めた「尾張連」氏が新たな開発拠点を見出そうとしていたことは想像に難くない。「山村郷」としてのまとまりはこの時点において明確な領域として設定されたといったものと考えておきたい。

現在の小牧市の発展は、二つの

路、段丘崖と谷路によって開かれ、やがて戦国時代に段丘崖の路を巧みに利用した織田信長は、小牧山城とその城下町を形成することになる。二つの路を結ぶ新たな拠点が造られ、街道が整備され、山村という領域が次第に見えなく、やがて消失していくこととなる。

【註】

- 荻野繁春1980『三ツ山古墳群発掘調査報告書』小牧市教育委員会
1981『愛知県の地名』日本歴史地名大系23平凡社
岩野見司1994『犬山扇状地上の古代寺院』『日本の古代遺跡 愛知』48保育社
楠部博世2003『内方前遺跡発掘調査報告書2』小牧市教育委員会
2005『愛知県史資料編3』古墳考古3
2010『愛知県史資料編4』飛鳥・平安考古4
城ヶ谷和広2010『墨書・刻書』『愛知県史資料編4』飛鳥・平安考古4
村松一秀編2017『西山遺跡』春日井市遺跡発掘調査報告第17集
2017『愛知県史通史編1』原始・古代
赤塚次郎2017『古代瀬波の領域とその基層文化について』『瀬波』NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク研究紀要4号

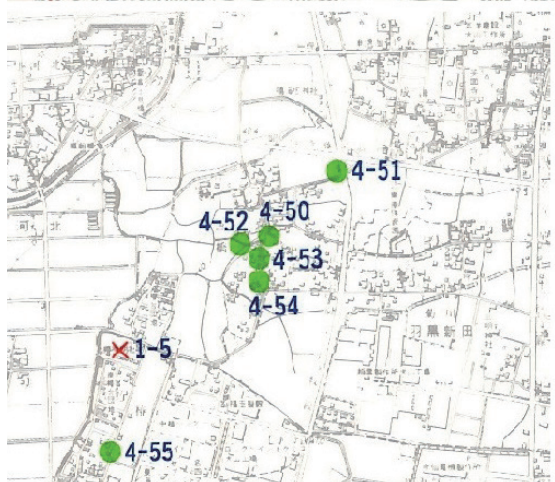
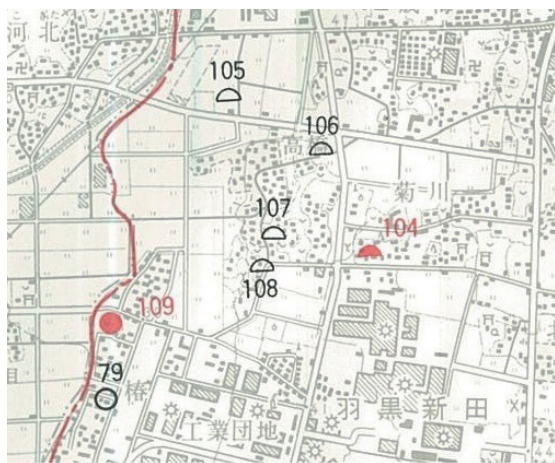


図1 分布図（上『県遺跡地図』下『犬山市史』）

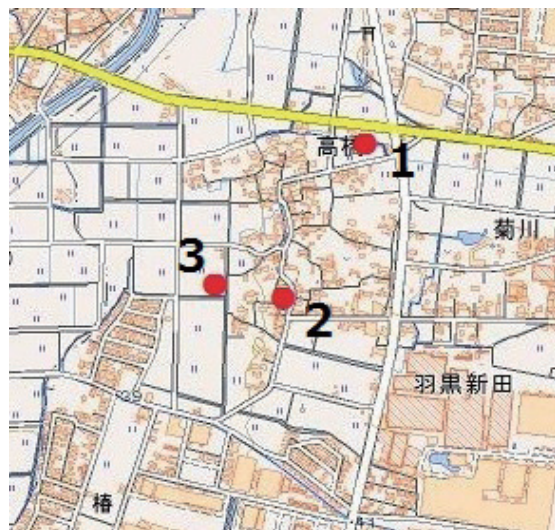


図2 位置図
（1.燈明塚 2.天道塚 3.山の神）

高さは1mほど」とする（文献7）。1983年刊行の『犬山市史』の時点で滅失となっており、1970年代の区画整理事業にともなって破壊された。埋葬施設、出土品等古墳にかかわる資料は知れず、古墳自体を疑問視する向きもある（文献6）。

高橋古墳群と天道塚古墳

― 邇波の遺跡踏査成果その4 ―

NPO法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

服部哲也・近藤健一

1. はじめに

NPO法人ニワ里ねっとでは現地の踏査を重ねることで、「邇波」エリア内の遺跡の再検討を進めている（註1）。今回は、犬山市羽黒の高橋地区について報告する。

高橋地区内では『県遺跡地図』に

「埋蔵文化財周知の包蔵地」（＝いわゆる「遺跡」）として、遺跡番号

104～108の5基の古墳が登録されている（図1の上 文献9）。

一方、『犬山市史』でも、同じく5基の古墳が記されるが、その位置と名称は『県遺跡地図』とは全く一致

2. 高橋古墳群

高橋古墳群は5か所に名前や番号が付けられているが、前述のとおりその位置は一致していない。さらに1～5号の番号の付加が混乱を増しているため、地元で呼ばれていた固

していない（図1の下 文献8）。本稿ではこれら混乱した状況を現地踏査・文献の再検討、さらに聞き取り調査を加えて整理する。また、天道塚古墳についてはこれまであまり触れてこられなかった文献を中心に再検討する。

燈明塚古墳（とつみよづかふん）

図2の1 写真1

有の呼称を基本に整理する。確実な地点が確認できたのは「燈明塚」「天道塚（天燈塚）」「山の神」の3古墳にすぎない。

名前の由来は「昔、高橋の集落と鳴海杵神社との間に水が流れ込み、神社に参拝できなかった時、この位置より参拝できなかつた時、この位置より参拝をし燈明を焚いた」（文献6）ことによるようである。位置は「日露戦争における戦死者の碑の北方30m」で、その規模は「直径5m・高さ1mほど」とする（文献7）。1983年



写真1 燈明塚跡地を望む（左奥は鳴海杵神社）

山の神古墳（やまのかみこふん）

図2の3 写真2

名前の由来は山の神が祀られていたことによる。『大山市史』の時点で「いつの間にか消滅」とされており、燈明塚と同じころの区画整理事業にて破壊され滅失した模様。埋葬施設、出土品等古墳にかかわる資料は全く知れない。

その他の古墳

地点が一致していないことは、逆に多くの古墳があった可能性も考え



写真2 山の神今昔
〈上・昭和55年頃（長谷川 利雄さん撮影） 下・現在の跡地〉



写真3 昭和2年発掘直前の様子（文献1）

られ、『県遺跡地図』の古墳地点については現地を踏査した。104番高橋1号墳（羽黒古墳）として登録されている地点は、マウンド等古墳らしき痕跡は全く認められない。また過去その場所に古墳の存在が議論されたこともない。105番高橋2号墳の地点も同様であり、そもそも湿地地形で古墳が立地できそうな土地でもない。2地点とも所在は「高橋郷」とされていることから明らかに間違いといえよう。特に104番地点については現在でもその地点が遺跡として現存していることと

なっているので早急な訂正が必要である。また、文献7では、天道塚・山の神より数10メートル南に2基の古墳を推定しているが、こちらも古墳らしき痕跡は認められなかった。

3. 天道塚古墳（てんどうづかこふん）

図2の2

【名称について】

天道塚（文献3）、高橋古墳（本文）・羽黒古墳（付図）（文献5）、天とう塚（文献6）、高橋2号墳（てんと塚）（文献7）、天燈塚（高橋2号）（文献

8）、高橋1号墳（羽黒古墳）（文献9）、高橋2号墳（文献10）と、かなり混乱している。15号墳が付されたのは1972年刊行の十三塚古墳の報告書以降の呼び方で、天とう塚の「とう」に「燈」の漢字があてられているのは市史からである。

さて、伊藤文四郎は、古墳上には柞（ははそ）の木があり、これを神木として病氣平癒を祈り「奉納天道宮」と記した幟を立てたと書いている（文献3）。このことから、古墳名は「天道塚（てんとうづか）」が相応しかろう。なお、羽黒古墳や高

橋古墳との呼び方は地元では全く使われていない。羽黒古墳については、「羽黒の石棺」として有名になった家形石棺の呼び名が古墳名に転化したものと思われる。

【所在地について】

地元の方々のご案内により明らかであり、図2に示した。現状墳丘は消滅しており、宅地と畑地になっている。ただ、周濠をもった古墳であつたならば、その痕跡が残っている可能性はあり、地上滅失といえども、発掘調査による成果は期待できよう。現在跡地には「羽黒地区コミュニティ推進協議会」作成の案内看板が立つ。

【古墳について】

墳形については不明と言わざるを得ないが、伊藤文四郎は円墳を想定している。規模も当時残存の面積からは直径10 m以下、遺存した高さも2 m以下となる（文献3）。

埋葬施設は矢吹葉人の報告中（文献1）の写真（写真3）からは「石棺直葬」とも見間違うが、伊藤文四郎は「石槨も大部分崩されて原形を

知ることが出来ないが正南に面してコの字形に築かれたもの」と石槨と石棺を明確に区別して報告している（文献3）。埋葬施設は、南に開口する横穴式石室と、同じく南北を長軸にして納められた家形石棺といえよう。また、「内部構造については、破壊の際切石が出たという」と、石室石材を「切石」と聞き取り調査した犬山高校地歴部の情報（文献6）は貴重である。これにより、木曽川中流域に多い川原石積み石室ではない可能性が高い。

【副葬品について】

文政年間に丹羽玄塘がまとめた『塘叢』には「大塚、高橋郷ノ中屋敷ニアリ、今塚中ヨリ石ノ櫃ノ角五六寸計見ユル、中古茂左衛門ト云者塚ヲ破リ石櫃ノ蓋ヲ取ルニ、中ニ德利壺ニ似タル物ニツ骨一ツ有之」と書かれている。この「大塚」が天道塚との確証はないが、石棺内に2個の壺（須恵器か）が納められていたと推定できる。なお、昭和2年4月の石棺発掘時に出土品はなかったようである（文献1）。

【家形石棺について】

伊藤文四郎は「刳抜式の家形石棺」で石材は「粗質の砂岩」、大きさは全長5尺4寸5分（1・65 m）巾2尺6寸（79 cm）高さ3尺2寸（1 m）重さ5百貫目はある（1875 kg）と記す（文献3）。

尾張・美濃地方の家形石棺は現在46例が確認できる。そのうち、木曽川中流域（可児市から一宮市にかけて）には、全体の70%以上にあたる32基が集中しており、木曽川中流域の後期古墳の特色となっている。犬山市内では6基（天道塚、上野1号墳・永洞古墳・善師野1号墳・善師野2号墳・蓮池古墳）が知られるが、善師野1・2号墳については伝承のみで全く不明である。また、近年の分布調査で、大平山の尾根上に横穴式石室の可能性ある石群と、その近くに石棺同様の石材が露出しているのを確認した。家形石棺を内蔵する新規の古墳である可能性を考えている（註1の2016年文献）。

濃尾地方の家形石棺の分類にあたっては、大石を刳り抜いて作る「刳抜式」と、板状石材を組み合わせて

作る「組合式」に大別し、更に蓋部に縄掛け突起の有る「有突」と、無い「無突」に分けている。当石棺は「無突刳抜式」（9例）となり、鵜沼狐塚棺（各務原市）、浅井14号棺（一宮市）、上野1号墳棺・永洞古墳棺（犬山市）とよく似る。当地域の石棺群の中では新しい形式であり、7世紀中ごろ以降の年代観を考えている。

石棺の材質は、岩石学的には礫質の凝灰岩、あるいは礫質の砂岩と呼ばれるもので、この石種の岩層は、愛知県犬山市から岐阜県可児市一帯に広く露頭する。特に犬山市善師野地区から産出する石は「イカイシ」と呼ばれ、竈石・石灯籠等に加工され、近隣が中心ではあるが（名古屋市内でも近世の遺構から出土例がある）近代まで利用されていた。当石棺も善師野地区での製作の可能性が高い。

【石棺の文様について】

当石棺のもっとも大きな特色は、文様が彫刻されていたことにあるが、同様な例は近隣の石棺群では皆無である。伊藤文四郎は「石棺の両側に壺形及勾玉様の粗雑な彫刻がし

である。その他にも彫刻らしいものが二、三あるが多年の侵蝕に依って摩滅し其の模様の何たるかを明瞭に知ることができない」としている(文献3)。これに対し、長谷川惠二・森徳一郎は「彫刻された文様に至っては学界の至寶



写真4 松坂屋での展覧会(文献2)

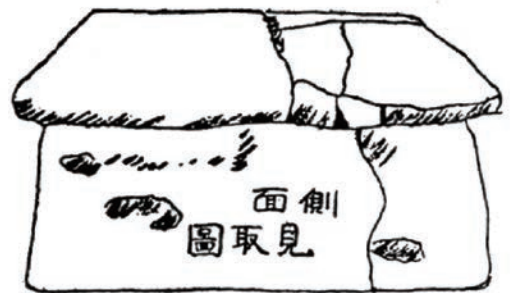


図3 家形石棺
(上・中・文献3 下・文献4)

たるにもかかわらず一向粗雑に扱われ片づけられているのはすこぶる遺憾に堪えない」とし、拓本を掲載して論に及んだ(文献4)。彫刻の発見から1年もたっていない伊藤の報告ですでに文様が明瞭でないことを述べているのに対し、5年後の森らが拓本を提示したことに不思議さを感じるが、いつ誰がどこで採拓したかは書かれていない。発掘に立ち会った矢吹葉人は「この石棺は松坂屋で開かれた展覧会に出陳されたが(註2)、その際棺の両側に玉や土器様の彫刻のあることが知れ、これは他に類例のなきものとして益々騒が

れた」と述べ、発掘時には気づかなかったことがわかる。また、伊藤の報告中の愛知県商品陳列館に置かれた時点と思われる石棺図や写真(図3上・中)は身が大きく二つに割れており、松坂屋の展覧会場から商品陳列館への移動時に割れた可能性が高い。文様の一つである壺(平瓶)の様な彫刻はちょうど頸部で2分割されることとなるが、拓本は割れていない状態である。これらのことから、採拓の時期は松坂屋展示期間とその前後のごく限られた短期間となる(註3)。

長谷川・森論文では彫刻文様は側

面に各2個と蓋石表面の都合5個であり、幅約1寸の単線を深さ5分に陰刻されているとする(文献4)。片方の側面の2つの「壺」と「勾玉」風の文様は松坂屋展示風景写真(写真4文献2)からも確認できるが、他の文様については、長谷川・森論文の拓本以外に写真・実測図・スケッチなどは知られていない。また、長谷川・森論文所収の石棺図は、伊藤文四郎論文所収写真をトレースし、それに彫刻文様を入れ込んだものであることがうかがい知れ、実測図ではないことも注意を要しよう(図3下)。また、蓋部の彫刻文様について

は位置の記述がない。拓本に入られたスケールをもとに彫刻の大きさを類推すれば2尺×1.5尺(約60cm×45cm)ぐらいあり、天井部平坦面には収まり切れない大きさであることも気にかかる。しかし、文献5・8では「蓋には上面の平坦部に蛇行状の溝があったということである」との聞き取り成果を載せているので、蓋部の文様は、斜面ではなく平坦面に彫刻されていたとおきたい。

次に、長谷川惠二・森徳一郎両氏の彫刻文様の解釈を紹介しておこう。両氏はこれらの文様を、側面1(図4上)左は胡桃(勾玉ではな

く、右は平瓶（酒）。側面2（図4中）左は魚（鯛）、右の円は御食（みけ）。蓋（図4下）には日影かずら（山野草）が彫られたものと見立て、死者を石棺に納め、草花をもって蔽い、山海の珍味を供して告別式を行ったと読み解いている。上記の説には是非の意見は持たないし、新たな可能性も提示しえないが、胡桃（勾玉）は「桃」や「月」、平瓶は「水鳥」の可能性はどうだろうか？との案が話し合いの中で出たことのみを記しておく。なお、家形石棺に彫刻がされていた例としては、奈良県御所市の水泥南古墳の羨道棺がある。寺院の軒丸瓦と同様な蓮華文が縄掛け突起に彫刻され、7世紀代の葬送に仏教の影響が及んでいたことを直接的に感じられる。実は当地も7世紀代には楽田（角池）廃寺が建立され、同じく楽田の蓮池古墳からは火葬骨を納めた蔵骨器（家形石棺と同じ石材使用）が出土しているなど仏教の受容は早い地域と言えよう。彫刻文様を検討するにあたって、仏教

的な内容を範疇に入れることもあながち否定できないであろう。

さて、天道塚石棺と同時期頃の近隣出土の家形石棺としては上野1号墳と永洞古墳がある。3棺に共通するのは内法の長さが130cm未満と短いことであり、大人の伸展葬は不可能である。また、火葬の始まりは文武4（700）年の僧道昭からと伝えられることから、火葬の普及までもまだ時期的な隔たりがある。そして、直葬（土葬）でもなく火葬でもない葬送方法としては、骨化してから納置する改葬（再葬）があり、小型家形石棺への遺骸安置はこ

の「改葬」であった可能性を考えている。上野1号墳と永洞古墳では、石棺内の人骨の様子が写真に残されているが、骨の各部位は原位置を保っていないし、さらに上野1号墳棺内には複数人の人骨が確認されている。再葬骨を納めたであろうことが首肯されるのであり、一体の遺骸を納める従来の棺のイメージとは大きく異なる。天道塚古墳石棺の彫刻にはこうした転換期の葬送儀礼が凝縮されているとも推測できるのであり、その解説は非常に重要な意味をもつ。なんとか読み解く努力を継続させていきたい。

「天道塚石棺の変遷」

愛知県の史蹟名勝天然記念物オーピングの「顔」として華々しく展覽会に出陳した天道塚の石棺であったが、その後は残念な結果として今につながっている。ここではその変遷をまとめておく。

文政年間 塚中ヨリ石ノ櫃ノ角五六寸計見ユル（文献11）
慶応年間 古墳面積16坪（文献3）
明治大正期 破壊が進み、石槨の両側及び後部と石棺の一部が露出（文献2）
昭和2年4月3日 石棺発掘（文献1）写真3

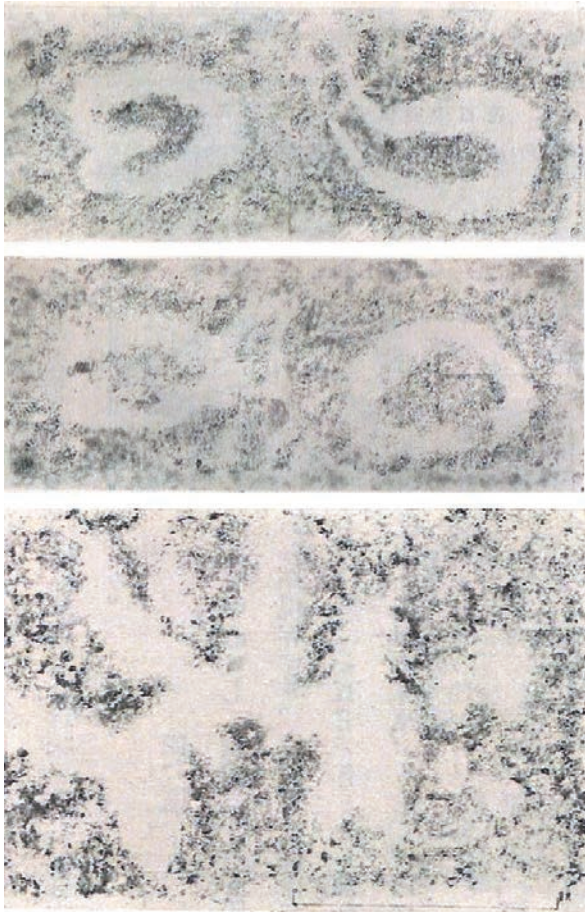


図4 彫刻文様
〈上・側面1 中・側面2 下・蓋〉（文献4）



写真5 愛知県商品陳列館（文献3）

昭和2年5月21日より1週間 愛知県史蹟名勝天然記念物資料展覧会（松坂屋）に出展（文献3）写真4
昭和2年5月 愛知県商品陳列館に移動（文献3）写真5

昭和2年7月 矢吹葉人発掘当日の様子を『史蹟名勝天然記念物』に発表（文献1）

昭和2年11月 『愛知県史蹟名勝天然記念物』展覧会（松坂屋）図録刊行（文献2）

昭和3年3月 伊藤文四郎『愛知県報告書第六』に報告（文献3）

この間、羽黒村尋常高等小学校に移動 註4

昭和7年 羽黒村尋常高等小学校玄関内東側に安置（木の柵を巡らし鄭重に保存）（文献4）

昭和7年 「羽黒の石棺の文様に就いて」長谷川恵二・森徳一郎の論考発表（文献4）

この間、玄関から学校東側に移動
昭和15年頃 学校内の奉安殿・忠魂社の横にあった。雨ざらし。（福富数美さん談）

戦後、奉安殿の解体、忠魂社の移転に伴い移動か。

昭和28年頃 武道場南側の軒下にあった。雨ざらし。石棺の上に乗って遊んだ。割れていたが屋根もあつた（長谷川文雄さん談）

昭和40年代 羽黒小学校舎の建て替え工事等にもなつて再度移動か？註5

昭和43年頃 身の一部を残しているだけで、出土当時のおもかげはまっ

たくなく一個の石塊にすぎない（文献5）

昭和47年頃 現状は全くひどくバラバラに破壊され、蓋と上部がすでに消滅し、わずかに石棺の底の部分のみが残っている。（文献6）

昭和48年 風化が進み保存に耐えなくなり校舎改築の折中庭に移し置かれた（文献8）

平成22年7月12日 校舎建て替えのため、中庭に埋まっていた石棺を掘り出す。（写真6）（文献12）

平成25年 校庭南西の覆屋内に保管（写真7）（文献12）

4. おわりに

羽黒高橋地区の踏査では、新たな古墳の発見には至らなかったが、天道塚古墳出土の石棺のたどった紆余曲折から、文化財の保護と活用についてあらためて考えさせられた。大正8年に施行された「史跡名勝天然記念物保存法」は急速に進む近代化の中、文化財の保存を目的にしたものであったが、愛知県でも大正11年に愛知県史蹟名勝天然記念物調査会が設立された。昭和2年に松坂屋で開催された『愛知県史蹟名勝天然記念物資料展覧会』は、県調査会としてはじめての大きな展覧会である。県内の史跡・名勝・天然記念物とい



写真6 羽黒小学校中庭（平成22年）

う、いわゆる「文化財」と定義された文物が一同に介されたことで、愛知県の文化財保護や博物館にとっての一大転機になったといえよう。天道塚石棺の発掘に立ち会った矢吹葉人も、柴田常恵に同行して愛知県に來た目的として①指定すべき史蹟の調査、②保存協会の趣旨の宣伝、③5月に開かれる史蹟名勝天然記念物展覧会の応援と明記している。そんな「文化財保護」の機運が高まる中掘り出されたのが天道塚の家形石棺であり、その宣伝の一翼を担うものと評価され急遽出展されたのである。現在しきりに叫ばれる「文化財の活用」に他ならない。そして展覧



写真7 現在の保管される石棺

会後は地元に戻らず、愛知県商品陳列館に保管されることとなった。愛知県商品陳列館は、明治43年に建てられたルネサンス様式の堂々たる建物で、各種展覧会や博覧会が開催されていた。いわば、博物館的な役割を担っていたことで石棺を保管するにふさわしいと判断されたのである。ただし、「裏門に近き事務室前の庭中」に置かれたのであり「保管」とは名ばかりの野ざらし状態であった。結果、この間に身は大きく二つに割れ、注目された彫刻も一気に不鮮明となった。「文化財保護」を目的とした「文化財の活用」が、かえって文化財を痛める結果となったこと

は明らかで「活用と保護」の両立の難しさを示した好例(悪例?)となっていましたのである。

また、高橋古墳群の現地も高度成長期の波に飲み込まれてしまう。区画整理や耕地整理が急速に進み、古墳は一つとして調査されることもなく一気に破壊され消滅した。体を張って「文化財保護」のPR役を努めた天道塚石棺の努力はここでも報われなかった。

しかし、救いもある。一つは天道塚石棺は傷つき痛みながらも地元の小学校に戻ったことである。松坂屋の展覧会に天道塚の石棺と並んで展示されていた「小幡古墳の石棺」



写真8 天道塚跡地と説明版

(写真4の奥に写っている)の消息はその後全く分からなくなってしまうことを思うに、帰郷できたことは当たり前そうでかなり難しかったことと推察する。そこに地元の意志が強く働いたであろうことは想像に難くないが、その中心に当時羽黒村尋常高等小学校の校長であった長谷川恵二の尽力を想定している。長谷川恵二は石棺が発掘された昭和2年から昭和12年までの11年間の長きにわたって校長を務め、その間に森徳一郎と「尾張羽黒石棺の文様に就て」(文獻4)を著している。また、この間の石棺は玄関内(もちろん室内)に「木の柵を巡らし鄭重に保存」

されていたのであり、郷土を愛し文化財の重要性をよく理解した学校長が居たからだからこそと思う。長谷川恵二の功績の調査も今後は進めたい。

そしてもう一つの救いは、今、石棺は羽黒小学校内の覆い屋に保存されていること(写真7)と、古墳のあった現地には解説看板が立つこと(写真8)である。長谷川校長後、残念ながら再び野ざらしの状態となった石棺は、昭和40年以降は見る

も無残な形となってしまっていた。ところが再び、その重要性を地元の羽黒地区コミュニティ推進協議会の皆さんが理解し、行政にも頼らない自らの努力でこれらを成し遂げられたのである。素晴らしい！

今こそ壊れてしまった来歴をも取り込みながら、天道塚古墳の石棺を「活用」しなければならぬと思う。それが文化遺産を活用するNPO活動の根幹でもあるから。

【註】

註1 これまでの成果は、当NPO法人の『研究紀要』にて紹介してきた。

服部哲也・近藤健一2014「入鹿池周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「瀬波」創刊号』

服部哲也2016「大平山周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「瀬波」3号』

服部哲也・近藤健一2017「蓮池・西山古墳群周辺の新規発見古墳について」『研究紀要「瀬波」4号』

註2 展覧会当日に配られた展示目録にはこの天道塚の石棺は載っていない。印刷に間に合わなかったほど急な出陳決定であったことをうかがい知ることができる。

註3 ただし、割れていた頸部の部分を、採拓後違和感なく丁寧に補正しているように見えなくもない。注意を要す。

註4 その時期と経緯はわからないが、移動先となった羽黒村尋常高等小学校の校長長谷川恵二の尽力を想定している。情報収集中である。

註5 昭和39年より昭和48年にかけて、中学校の移転や体育館、プール、そして新校舎の竣工と校内での工事が立て続けに行われた。

そんな混乱期に重く移動の不便な石棺が邪魔者扱いにされていたのではないかと推測する。こちらにも情報収集中である。

【文献】

1 矢吹葉人1927「十日路の尾三(完)」『史蹟名勝天然記念物』第二集第七号 史蹟名勝天然記念物保存会

2 愛知県史蹟名勝天然記念物調査会1927「史ノ八 石棺」『愛知県史蹟名勝天然記念物』

3 伊藤文四郎1928「丹羽郡羽黒村羽黒の石棺」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告 第六』愛知県

4 長谷川恵二・森徳一郎1932「尾張羽黒石棺の文様に就て」『史蹟名勝天然記念物』第七集第一号所収 史蹟名勝天然記念物保存会

5 犬山市教育委員会1968『上野古墳群 犬山市埋蔵文化財調査報告』

6 犬山高校地歴クラブ1972『地歴学報 第9号 犬山の古墳の現状』

7 犬山市教育委員会1972『十三塚第3号墳・熊野第1号墳 犬山市埋蔵文化財調査報告 第2集』

8 犬山市教育委員会・犬山市史編さん委員会1983『犬山市史資料編三 考古・古代・中世』犬山市

9 愛知県教育委員会1994『愛知県遺跡地図(Ⅰ) 尾張地区(遺跡地名表)』

10 愛知県史編さん委員会2005『愛知県史 資料編3 古墳 愛知県』

11 丹羽玄塘 文政年間『塘叢』

12 羽黒地区コミュニティ推進協議会2016『民話の郷を訪ねて』

謝意 羽黒地区の福富教美さん、長谷川利雄さん、長谷川文雄さんには大変お世話になりました。ありがとうございました。

呉州赤絵にみる丹波焼・三田焼・犬山焼

高浜市やきものの里かわら美術館
井上あゆこ



1. はじめに

兵庫県の篠山市では、独特の赤みを帯びた胎土に、自然釉や赤土部釉・灰釉・黒釉などを施した「丹波焼」がある。また、篠山市に隣接する三田市では、三田青磁ともいわれる青みがかった深い青緑の色調をもつ青磁の「三田焼」がある。そして、愛知県犬山市は、赤絵と雲錦手の二種



写真1 中国呉州赤絵花文盤（愛知県陶磁美術館）

類を代表的な図案とした「犬山焼」がある。この三箇所の窯業地のやきものには、それぞれに特徴があり混同することはないが、非常に似た意匠を採用している点で共通する。それは赤を主調とし緑や黄・紫・青で上絵付したやきものの「赤絵」にある。

国内における赤絵の遡源となる明時代の中国呉州赤絵花文盤（写真1）は、釉に僅かな虹色の光沢があり、高台は細かな砂粒が付着した砂床である。一七世紀前半に中国から肥前国に伝わった赤絵が、佐賀（有田焼）・石川（九谷焼）・京都（京焼）・滋賀（湖東焼）・三重（万古焼）など日本各地で模倣されてきたが、一九世紀初めには丹波焼・三田焼・犬山焼の赤絵が完成に至った。

そこで、丹波焼・三田焼・犬山焼の胎土や成形、釉薬、上絵付などを比較しながら、共通点と相違点を提

示していきたい。

《丹波焼とは》

丹波焼は、兵庫県（丹波国）多気郡今田町にある小野原・上立杭・下立杭・釜屋の諸窯で焼成され、立杭焼とも称されている。常滑窯（愛知県常滑市）の影響を受けて平安時代末（一二世紀後半）に始まり、赤銅

色の胎土に自然釉のやきものが焼成されるようになった。中世のものは「古丹波」と称されている。江戸時代初期（二七世紀初頭）には、赤土部釉・灰釉・黒釉などの日用雑器が生産される。また、江戸前期の茶人・小堀遠州（一五七九～一六四七）により、創作された茶道具は「遠州丹波」と称され、名物も数多く伝世している。写真2-①の胴下部は、独特の赤みを帯びた素地が露胎となっており、胴上部は灰釉が施されている。同じ胎土で制作され、化粧土と透明釉を施した丹波焼の赤絵が写真2-②である。見込みには牡丹と鳳凰、側面には魚が描かれている。



②丹波焼 色絵牡丹鳳文鉢（兵庫陶芸美術館）



①丹波焼 灰釉四耳壺（兵庫陶芸美術館）



④三田焼 呉州赤絵写花鳥図鉢（古三田青磁・三田焼研究保存会）



③三田焼 青磁牡丹文角皿（兵庫陶芸美術館）



⑥犬山焼 赤絵牡丹文皿（犬山市文化史料館）



⑤犬山焼 雲錦手大皿（犬山市文化史料館）

写真2

《三田焼とは》

三田焼は、兵庫県（摂津国）三田市の天狗ヶ鼻窯、三輪上野窯、三輪明神窯、三輪明神前窯、虫尾新田窯、志手原窯、志手原新窯などで焼成されたやきものである。宝暦年間（一七五一～一七六四）に始まったとされ、享和元年（一八〇一）に青磁の原石を香下村砥石町で発見し、文化年間（一八一〇～一八一八）の初めに青磁の焼成に成功している。

写真2・③はタタラ造りの型打成形で、牡丹文が浮き出る角皿に化粧土を施し、その上から掛けられた青磁釉の濃淡が文様の凹凸をより立体的にみせている。写真2・④は三田焼の赤絵である。三田市と篠山市は隣接しているため、類似する胎土が使用され、その上から白釉が施されている。鳳凰と牡丹が濃い色調で描かれる。

《犬山焼とは》

犬山焼は、現在の犬山市丸山新田の丸山窯で文化七年（一八一〇）に創業された。犬山焼では、赤絵や、京焼の雲錦手を参考に成瀬家家臣の

福本雪潭が意匠創作したとされる花紅葉（雲錦手）を代表的な図案とした上絵付が施されている。犬山焼の雲錦手には高台内側に「犬山」「乾山」などの銘がみられるが、赤絵は無記名が多く、まれに押印が確認できる。写真2・⑤の高台内側には乾山の銘が鉄絵具で描かれている。写真2・⑥は、見込みに牡丹、側面の窓絵には菊が描かれている。

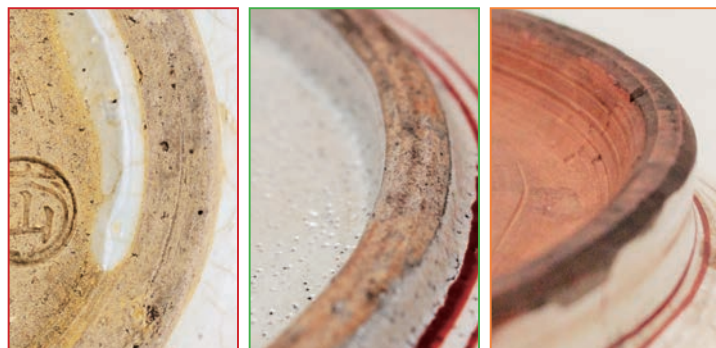
2. 胎土の相違点

丹波焼と三田焼の胎土は、きめが細かく赤みを帯びた褐色・茶褐色で、鉄分を多く含み酸性が強い特徴を持つ。兵庫県南東部を流れる武庫川は、丹波山地の白髪岳付近を源流とし、三田盆地で支流と合流して大阪湾へと流れる。その武庫川周辺は、良質の陶土に恵まれ、丹波焼と三田焼の陶土採掘地となっている。写真3・①は丹波焼の特徴的な赤い土がみえる。写真3・②の三田焼は、施釉後に拭き取っているため白っぽくなっているが、丹波焼と同様の胎土がみえる。

犬山は美濃に近く、犬山の丸山新田の陶土で焼成される犬山焼の胎土

は美濃焼に類似し、写真3・③のように長石などの砂粒を含んでいる。

愛知県と兵庫県の胎土は明らかに違い、露胎部分がある作品については、犬山焼の判別は比較的容易である。問題は丹波焼と三田焼の判別であるが、同じ採掘地の陶土を用いているため、胎土には違いがない。そのため、技法上の特徴を比較し判別の手掛かりとしていきたい。



③ 犬山焼
(犬山市文化史料館)

② 三田焼
(兵庫陶芸美術館)

① 丹波焼
(兵庫陶芸美術館)

写真3

3. 成形の相違点

現在までに犬山焼研究団体・犬山焼ミュージアムが調査した作品で、丹波焼・三田焼・犬山焼の大皿を比較すると、図1のような傾向がみられた。

丹波焼では、底部外縁に沿って高台を設定し、ヘラで調整する。そして、畳付内外端部を浅く削って仕上げていく。一方、三田焼は、丹波焼に比べて畳付内外端部を大きく削り、畳付の接地部分が非常に狭くなっている。

丹波焼と三田焼は、全体に均一な厚みで、大形の作品であっても歪みの少ないロクロ成形が多い。また、見込み部分を裏側から押したように意図的に膨らませている作品も

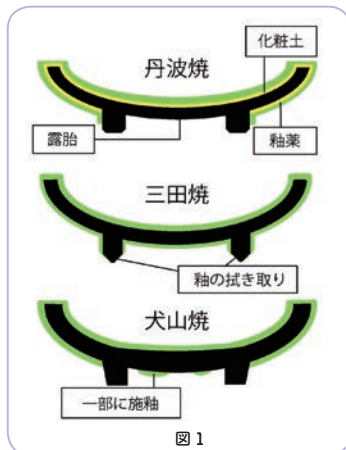


図1

あり、中国呉州赤絵の特徴を細部まで模倣しようとした様子がうかがえる。

犬山焼は、高台外側が少し内向している。これは幕末から明治時代にかけての削り出し高台に多くみられる形状である。また、多くの犬山焼は底部に厚みがあり、外観の印象よりも重量感がある。ロクロ成形の技術は決して高いとは言えず、厚みのムラや、多少の歪み、焼成時の亀裂がみられる製品でも流通していたようである。

4. 釉薬の相違点

丹波焼（写真4-①）は化粧土を施し、器表の凹凸や隙間を詰めている。その上から灰釉を施しているため、鉄の吹出しや気泡が少ない。また、化粧土が僅かに透け、黄み掛かった乳白色の釉調となる。また、高台端部は刷毛塗りされており、畳付と高台内側は露胎となっている。

三田焼（写真4-②）は、丹波焼と同様の鉄分を含む胎土に白釉を施す作品が多い。全面施釉で、畳付端部の釉が拭き取られている。器表には鉄の吹出しや気泡があり、特に高



③ 犬山焼
(犬山市文化史料館)



② 三田焼
(兵庫陶芸美術館)



① 丹波焼
(兵庫陶芸美術館)

写真4

台の周辺に多くみられる。

犬山焼（写真4-③）では、高台を掴んで施釉した指跡が残る作品が多く、高台端部まで意識的に施釉した作品は少ない。また、高台内側には部分的に釉が掛けられている。

5. 共通の題材図案による絵付け

赤絵の図案は中国の呉州赤絵を模倣したものであり、その華やかな色合い、勢いある筆致、吉祥文を散りばめた構図などが模倣された。日本の呉州赤絵写しは、産地が違っても非常に似た図案がみられる。写真5-①・②・③では、中国呉州赤絵・丹波焼・犬山焼から、鳳凰と牡丹の類似する構図が用いられた作品を比較していく。

中国呉州赤絵（写真5-①）は鳳凰・牡丹、龍には透明度の高い紺が用いられ、黒の骨書きがはっきりと

透けてみえる。丹波焼（写真5-②）にも同じように鳳凰・牡丹と龍が描かれ、口縁の文様も類似している。犬山焼（写真5-③）は、鳳凰と牡丹の構図が②と類似するが、内部側面には花の窓絵に赤玉と四方襷が描かれている。

中国呉州赤絵（写真5-④）・三田焼（写真5-⑤）・犬山焼（写真5-⑥）の香合では、大きさ・形状・絵付けが類似している。茶人の間で人気が高い形状のようで、安政二年（一八五五）に刊行された『形物香合相撲』では、相撲の番付表に見立てた人気ランキングで「西前頭十



④中国呉州赤絵 赤絵牡丹文香合
(東京国立博物館)



①中国呉州赤絵 呉州赤絵龍鳳凰文皿
(兵庫陶芸美術館)



⑤三田焼 赤絵牡丹文香合
(三田市)



②丹波焼 呉州赤絵写花鳥図大皿
(兵庫陶芸美術館)



⑥犬山焼 赤絵牡丹文香合
(犬山市文化史料館)



③犬山焼 赤絵牡丹鳳凰鉢
(犬山市文化史料館)

写真5

枚目」に位置付けされている。

写真6-①・②は丹波焼と三田焼で二羽の鶴と鳳凰が描かれる。口縁周辺の文様と、四窓のうち二窓の窓絵は双魚で一致する。

写真6-③・④は、三田焼と犬山焼の魁文で、構図・配色が非常に類似する作品である。「魁」の文字を比較すると、三田焼(写真6-③)は、「鬼」と「斗」、犬山焼(写真6-④)では「鬼」と「未」の形でそれぞれ組み合わせられている。両者にみる「魁文」の作品は数点しか比較できなかったため、絵付師の文字癖の可能性もあるが、三田焼の文字は「魁」の原形に近い傾向にあった。

中国呉州赤絵には、楼閣・松・竹・梅を背景にする麒麟の意匠をもつ鉢がある。犬山焼(図6-⑤)では、松と竹が一体化しており、画面左にある梅は赤丸のみで簡略されている。三田焼(図6-⑥)では、中心の麒麟が獅子と混同されている。絵付師が手本とした作品や画帖は、模倣を重ねて原形を正確に伝えられなかったのではないかと思われる。

6. 絵具の色調・発色の比較

丹波焼・三田焼の絵付けは、犬山焼と比べて色調が濃い。赤色の絵具は厚めに塗られ、真紅に発色している。また、緑色の絵具も濃い深緑に

発色し、犬山焼より使用される割合が高い。

犬山焼の赤色の絵具は、薄めに塗られ、朱色に発色している。緑色の絵具は、器表に厚く塗られるが、透明度が高く緑青・緑白に発色する作品が多い。

7. おわりに

丹波焼・赤い胎土・高台端部内外を浅く削る・化粧土を施す・高台内側は露胎・気泡の少ない黄乳白色の釉・赤と緑の色調が濃い。

三田焼・赤い胎土・高台端部内外を深く削る・全面施釉で畳付拭き取り・鉄の吹出しと気泡が高台周辺に多い・白釉・赤と緑の色調が濃い。

犬山焼・長石などの砂粒を含む胎土・底部に厚みがある・高台内側一部に釉掛け・高台周囲の釉に指跡が残る・赤色の絵具は朱色系で緑は透明度が高い。

胎土・高台の形状・化粧土の有無・釉調・高台周辺にみられる鉄の吹出しや気泡・絵付けの筆致など、三箇所の窯業地を比較することで判明した特徴や傾向は、赤絵の産地を判別する手掛かりになると考えている。

しかし、今回の結果はこれまでに調査した限られた作品で、丹波焼・三田焼・犬山焼以外の赤絵についても引き続き調査し、比較検討する必要がある。

本稿の執筆にあたり、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対し、ここに記して深く感謝の意を表します。
(敬称略、五十音順)

愛知県陶磁美術館

古三田青磁・三田焼研究保存会

三田市教育委員会

東京国立博物館

兵庫陶芸美術館

青木修

佐久間真子

中野耕司

【参考資料】

加藤唐九郎 1972 『原色陶器大辞典』

兵庫陶芸美術館 2017 『特別展 丹波焼と三田焼の粋を集めて―森基コレクションの名品―』

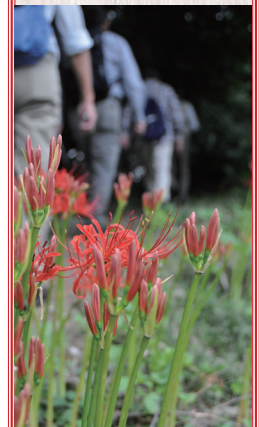
三田市 1983 『市政25周年記念 古三田青磁―ふる里のやきもの―』

古三田青磁・三田焼研究保存会 1986 『ふる里のやきもの―古三田青磁 第二集』

犬山市字北洞出土の須恵器について

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

大塚 友恵



1. はじめに

本稿では、新たに確認された犬山市字北洞出土とされる須恵器の資料紹介を行う。

資料が確認されることとなった経緯は、楽田地区コミュニティ推進協議会歴史文化部会（以下、楽田歴史文化部会）の部会員より、地区内で出土した考古資料を地元の方が所有されているとの情報提供いただいたことがきっかけとなり、その後、楽田歴史文化部会と二ツ里ねつとが合同で資料調査及び所有者への聞き取り調査を行った。以下に聞き取り調査成果と資料の詳細を報告する。

2. 新規確認の資料紹介

今回紹介する資料は、須恵器5点である。これらは個人で所有・保管されており、これまで『犬山市史』

などにも未報告の資料である。なお、須恵器以外に山茶碗1点も一緒に保管されていた。

資料が発見された当時を知る方はすでにご存命でなく、出土地点並びに出土状況の詳細は知り得なかった。現在の所有者の方が先代より伝え聞いた事柄を書き留めておく。

これら資料が出土したとされるのは犬山市楽田地区の字北洞周辺で、本宮山（標高298・2m）から北西に連なる丘陵の西側に位置し、丘陵から西へ伸びる枝尾根のどこかから見つかったと伝わっている（図1の赤丸範囲内）。なお、地元ではこの尾根を「天王山」と呼んでいるそうである。本宮山西側の丘陵一帯は、戦前から果樹園として広く開墾されており、資料が見つかった尾根も、現在は南斜面の一部のみだが、かつては尾根

全体が果樹林だったようだ。資料は、所有者の祖父が、大正年間頃にこの尾根を開墾した際に見つかったのではないかとされる。

報告資料の実測図を図2に、集合写真を写真1に載せた。実測図の縮尺は1/3、図中の矢印は回転ヘラ削りの回転方向と範囲を示す。

【資料1】杯身

（図2の1）

口径11・9cm、器高4・8cm、底径4・6cmで、ほぼ完形の状態である。口縁部はやや内傾して立ち上がる。

【資料2】蓋（図2の2）

口径8・1cm、器高3・7cm、鈕^{つまみ}径2・7cmで、ほぼ完形の状態である。外面は暗灰色だが、そ

底部の約1/2までが回転ヘラ削りで調整され、さらに回転ヘラ削りで小平底に仕上げられている。



図1 須恵器が出土したとされる地点（赤丸範囲）

（国土地理院発行電子地形図1/25000に加筆。）

れに比べて内面は黄白色を呈す。
口縁短部の内側にわずかに段がつく。天井部と口縁部の境には稜線を有する。天井部には、扁平で中

央の凹む鈕が付けられ、鈕の直下から、天井部の3/4程度が回転ヘラ削りで調整される。資料3短頸壺とセットになる可能性もある。

【資料3】短頸壺（図2の3）
口径7・0cm、器高2・7cm、底径4・7cmで、ほぼ完形の状態である。短い頸部は内傾し、口縁

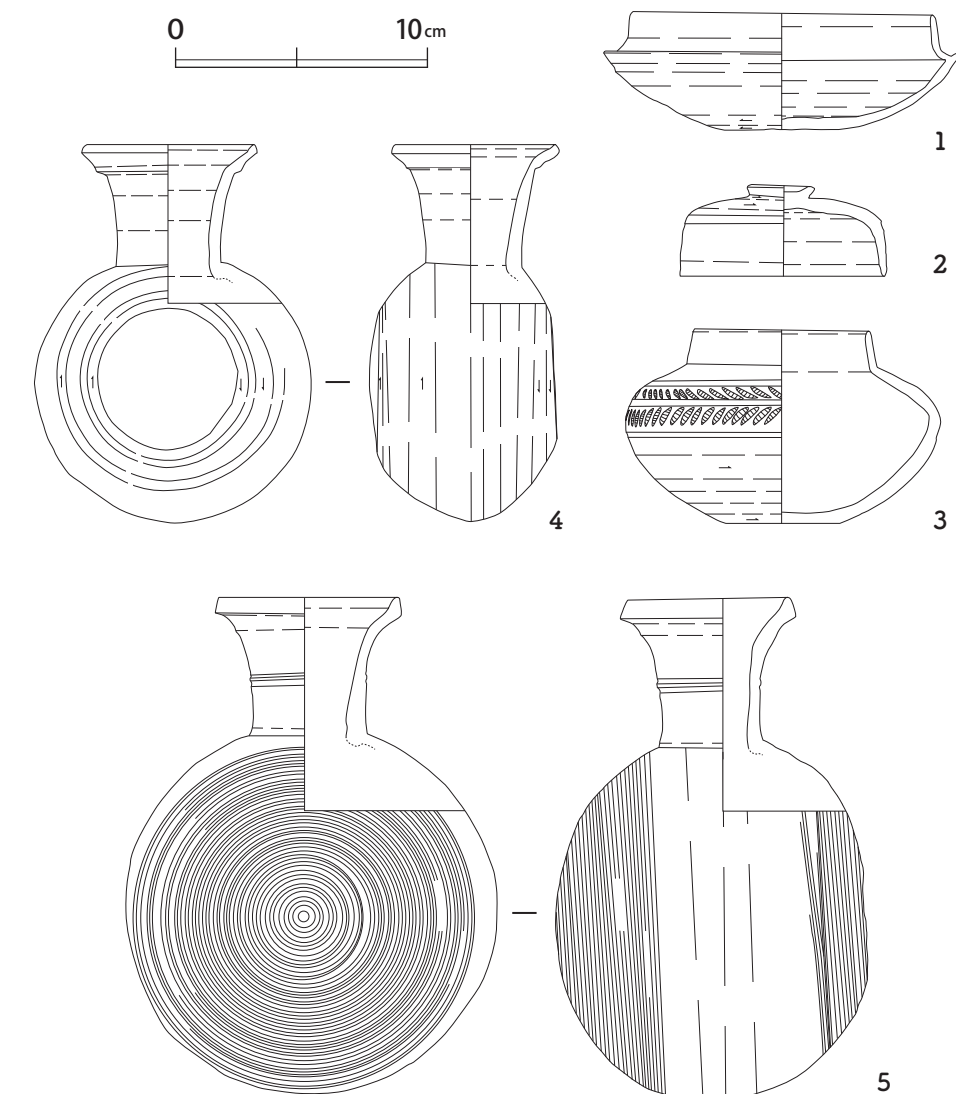


図2 字北洞出土資料 実測図（1/3）

端部の内側がやや斜めになる。胴部と比較して頸部が白っぽく、蓋を重ねて焼成した可能性もある。底部から胴部の約1/3まで回転ヘラ削りで調整され、底部は丁寧に整形され平底となる。胴部には、V字条になるように、櫛状工具による列点刺突文が連続して施されており、それを挟むように、後から3条の沈線が施されている。

【資料4】埴瓶（図2の4）

口径6・7cm、器高15・0cm、胴最大径11・0cmで、ほぼ完形の状態である。頸部はやや外反して開き、口縁直下に低い突帯が1段つく。胴部は偏球形で、両側面とも中央から外に向かって回転ヘラ削りで調整された上、片面は静止ヘラ削りとナデ調整で、もう片面は回転ヘラ削りで、さらに平坦な面が整形されている。

【資料5】埴瓶（図2の5）

口径6・7cm、器高19・7cm、胴部最大径14・8cmで、ほぼ完形の状態である。頸部はやや外反して開き、2条の沈線が施される。

口縁端部の外側に縁帯がつく。胴部は偏球形で、両側面とも、櫛状の工具によって同心円状にカキ目が施されている。

資料の時期について

杯身の形態的な特徴から、窯式編年のⅡ期第3小期・蝮ヶ池窯式期のものと考えられ、実年代は6世紀後葉頃である(註1・文献1)。その他の資料も、6世紀後半代から7世紀にかけての、後期古墳が各地で数多く築造される時期に値するものと考えられる。

考察

以上報告の新規確認資料について、不確かではあるが仮に字北洞の尾根上から出土したものとして、最後に考察を加えたい。

1967(昭和47)年発行の『楽田村史』に、「二宮山続きの北方一帯の山腹西面」に古墳が数多く存在していたが、「果樹栽培の為に悉く破壊せられて了った。」とある(文献2)。またこれらの古墳からは「祝部土器」(＝須恵器)が出土したともある。字北洞は本宮山

から北西に連なる丘陵の最南端に位置しており、本宮山を「二宮山」とすると、この「二宮山続きの北方一帯の山腹西面」の範囲に入るであろう。また、どの資料もほぼ完形で見つかったことから、良好に残存した古墳の横穴式石室内部から見つかったのではないかと推測される。現在は尾根全体が整地されており、現地踏査では古墳らしい遺構は確認できなかったが、資料の存在から、横穴式石室を伴う未知の古墳がこの尾根上に存在していたと考えられる。

3. おわりに

本宮山西側の丘陵中には数多くの古墳が存在したとされるが、そのほとんどが戦前・戦後の開墾で滅失してしまい、その実態は全く分かっていない。そうした中、データは不十分であるが、今回紹介した様な伝世品も、古墳群に関する情報を補填する資料と十分なり得るだろう。しかし、当地が開墾され始めてから90年以上経った今、そうした資料の存在は忘れ去られつつあるのではないだろうか。現

に、今回の場合も、資料に関する記憶は失われつつあった。残されたわずかな情報が散逸してしまう前に、現地での聞き取り調査も含めた悉皆的な調査が急務となっており、ニワ里ねつとでは、引き続き調査を進めていきたいと思う。

最後に本稿の執筆にあたり、左記の皆様にご協力・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略、五〇音順)

楽田コミュニティ歴史文化部会・
金山員子・河村典久・倉知恒雄・
服部哲也

【註】

註1 須恵器の編年観は、(文献1)に依拠した。

【文献】

- 1 愛知県史編さん委員会2015『愛知県史別編窯業1 古代猿投系』愛知県
- 2 楽田村史編さん委員会 1967『楽田村史』



写真1 字北洞出土資料

ニワ里ねっと 会員募集

ニワ里ねっとでは、
文化遺産が見えるまちづくり

をコンセプトに、
活動しています。

青塚古墳と堀部邸にて、
皆さんの参加をお待ちしております。

青塚古墳

木之下城伝承館・堀部邸



NPO 法人

にわ
古代邇波の里・

文化遺産ネットワーク

(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸
(NPO 事務所)

〒484-0084

犬山市大字犬山字南古券 272

TEL:0568-90-3744

FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園

〒484-0945

犬山市字青塚 22-3

TEL:0568-68-2272

HP 《ニワ里ねっと》

<http://niwasato-net/home>

《木之下城伝承館・堀部邸》

<http://horibetei.com>

研究紀要 第5号

niwa

邇波



《編集・発行》

NPO 法人

古代邇波の里・文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》

平成30年5月20日

ニワ里ねっと会員募集

ニワ里ねっとでは、会員・賛助会員を募集しています。

私たちと一緒に文化遺産を活かしたまちづくりに参加
しませんか？

会 費

正 会 員 一口 3,000 円

賛助会員 一口 3,000 円 (個人・団体とも)

会員特典

1. 会員証の発行。会員証の「参加印」を集めると、記念品を贈呈。
2. 会報「さとの四季だより」を年6回お届け。
3. 各種イベントに会員料金で参加。

申込方法

方法1. 青塚古墳ガイダンス施設の窓口にて受付。

方法2. 下記郵便振替口座へお振込み。

通信欄に、「年会費」とご記入ください。新会員様は、「新規正会員」または、「新規賛助会員」と明記の上、住所・氏名等を必ずご記入お願いいたします。(※申し訳ありませんが、手数料はご負担願います。)

郵便振替口座

口座番号 00850-9-198552

口座名称(漢字) 特定非営利活動法人 古代邇波の里・文化遺産ネットワーク

口座名称(カナ) トクヒ コダイニワノサト プンカイサンネットワーク

上記の郵便振替口座にて「寄付金」も受付けております。

ニワ里ねっとの活動の応援、よろしくお願いいたします。



ニワ里ねっとでは、
文化遺産が見える
まちづくり
をコンセプトに、
活動しています。

